



■研究課題名：ネガティブな養育行動には理由(わけ)がある：アタッチメント研究に基づく理解
■研究者名、所属：安藤智子 人間系・心理学域
■研究分野：発達臨床心理学
■キーワード：アタッチメント・感情・養育行動・子どもの行動

【研究の概要】

喜び、苦痛、恐れ、怒り、嫌悪などの感情には生物学的な基盤があり、感情自体に自己や他者、状況や体験を理解する手がかりがあります。恐れや怒りなどのネガティブな感情も排除することなく感じ、調整し、その意味するところを探索することで、問題に対応することができます。それは子どもでも同様です。むしろ子どもだからこそ、ネガティブ感情に大人が気づき、そう感じてよいのだと寄り添い、落ち着く手助けをしてもらえれば、その感情体験を統合することができます。ボウルビィ(1982)は、アタッチメント対象とは、子どもが苦痛を感じていたり、身体的に傷ついたり、ひとりぼっちだと感じていたり、病気のときに、より大きくより強くより賢く対応して、安心の基地になり、外界を探索する安全な基地となる人だとしています。ネガティブ感情への対応とアタッチメントは密接な関係があるといえます。

私たちは、子どものネガティブな感情への対応を測定する尺度（Coping with Toddlers' Negative Emotion Scale; Spinrad, et al., 2004）を邦訳して2歳から4歳のお子さんをもつ保護者247名に回答いただきました。本尺度は、子どものネガティブ感情が生じる12の場面における、6つの対応から成っています。「子どもが友だちと一緒に活動をするときに、失敗して恥ずかしがって泣きそうになったら、私は、」に「慰めて、子どもの気分がよくなるようにする；感情焦点対応」「次はうまくできるように、一緒に練習をしよう、と話す；問題焦点対応」「子どもに、恥ずかしい気持ちを自分に話すよう励ます；感情表出を促す対応」の3つの対応は、子どものネガティブ感情に気づいて、その表出を促し、共に制御し、問題解決について考える、支援的な対応であるとされています。一方、「しっかりしないともう家に帰るよ；罰する対応」「子どもに『気にしすぎだ』と言う；最小化する対応」「自分が落ち着かなくなったり、恥ずかしく感じる；苦痛反応」という3つの対応は、子どものネガティブ感情を罰したり、あつてはならないという親の態度と、親自身が動揺する態度で、子どもの感情制御や心理社会的な発達への非支援的な態度とされています。

私たちの日本での調査でも欧米の結果と同様に、子どものネガティブ感情への親の支援的な対応は、子どもの行動上の問題（多動、情緒、仲間関係、行為など）と負の関係、向社

会行動と正の関係があり、非支援的な対応はその逆でした。つまり、子どものネガティブ感情の存在を認めて、表出を促すこと、また、その感情を手がかりに、子どもの感情の制御を手伝い、慰めて、気持ちが落ち着いたら問題解決を手助けする対応は、子どもが感情や行動をコントロールできることや適応的な行動と関連しました。逆に、感情を罰したり、ないものにすることがネガティブな感情表出や、行動の制御困難と関連がありました。さらに、非支援的な対応と、親のアタッチメントスタイルも関係があり、親のアタッチメントに関連する経験と子どものネガティブ感情への対応には関連があると推測されました。

コロキアムでは、ハーローの実験及びストレンジ・シチュエーション法の映像を紹介し、アタッチメントシステムと探索システム、アタッチメントの個人差の形成について解説しました。

不安定/回避型の子どもは、親が子どものネガティブ感情を苦手にするので、困ったときに親にくっつくためには、泣かない、ネガティブ感情を出さない選択をしており、不安定/安定型の子どもは、親の対応が一貫しないので、苦痛があるとできるだけ大きな信号を出してくっつきます。親のうけとめに応じて一次的な欲求であるアタッチメント欲求を抑え込んだり、探索欲求を抑え込むことで適応します。長じて親になったときに、子どものアタッチメント欲求であるネガティブ感情を、甘えている、自立していないと感じて、非支援的な対応をとる発達経路があると考えられます。

【期待される意義や波及効果】

邦訳した尺度は、介入研究の効果測定をはじめ、養育に関連する研究に応用していただけます。また、不適切な養育へのアタッチメントに基づく理解は、親子への支援や介入に役立てていただけます。つまり、ネガティブな養育をする親には、特に、親自身のアタッチメント欲求に応える支援が必要だと理解します。親がネガティブ感情を安心して話せる場をつくることや、「子どもの欲求に応えるのは本当に大変だよね」「いつまで続くんだと思うよね」「それを私に話してくれてありがとう」とネガティブな感情を肯定し、寄り添い、気持ちを落ち着けるのを手伝うことなど、具体的な支援の方法に応用できます。

【研究成果等】

TRIOS から確認ください

<https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/00000001557>